

明治  
新撰

西京繁昌記

增訂  
守正編輯

上

76

3206

1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

門 7 6  
3206  
4  
8885  
1-2

增山守正編輯

久保田米俤画

明治

新撰

西京繁昌記

京都書房 二書堂合梓

西京繁昌記題辭



自北多於人子。然於古。具十二分之華  
舌者。不可以此。西京繁昌記也。自北明於  
治證。通於可情。備十二分之才。學者。不  
可以讀西京繁昌記也。甚矣哉。作否者  
與漢馬者。之。寧。之。其。也。丹波增山  
氏。登攻究命。跼。之。游。又喜此。此。戲  
文。其。可。筆。攝。思。頃。刻。子。言。馳。聘。如





西京雜記

意。咄咄成事。豈生所深老於人事。  
能於世也。吳十二分之筆。未若此也。  
抑予亦嘗若西京傳新。比頗守者。  
可景况。謂繪多人口。唯筆未遲鈍。時  
亦人情。疎乎世也。今而顧急。性時。未必  
無嘆。福之悔也。今幸獲增山氏。能藎  
揮。西京雜記。其景况。且以補予  
之。所不及。予之悅。可也。况方今。開

明。奎運日盛。履履皆命。其後字解  
文者。誰在。明於治體。通於人情。僅  
十二分之寸學。以能。讀此書者。

明治九年。丙子十一月二十。又公。三。漢。居  
古。第。代。純。撰。并。書。於。平。安。之。條。磧。  
街。小。寓。水。齋。多。矣。



明治新撰 西京繁昌記初編序

王政復古連屬維新自明治之改革以來  
文明之善開化之莽日進月盛煥乎可仰  
寫置郵止便電信之捷瀟車于陸瀟船于  
海其他百般不可勝枚舉真聚百便於一  
掌豈非愉快耶然而西京者三府之一而  
從桓武定鼎以還數百季來為皇居  
止土四神相應山水明媚神社佛閣頗多

勝區舊蹟亦不尠而加之沃野平闊實天  
府之地也而僕當今寓於此地將有記之  
聞先輩既有此著雖然人心不同各如其  
面則著眼注意亦隨異也何踏履之嫌因  
不願平文記所目擊之實跡題曰明治新  
撰西京繁昌記以鳴其盛云爾

明治十年三月 丹波 增山守正撰

菊谷保藏書

西京新街  
每自昌  
夜之系  
米俸



明治新撰 西京繁昌記初編

凡例

一 新京極通繁昌の中觀物技藝時は従ふて去來増減あり故は一定する能ハざる唯僕が近頃目撃する所の者を記載する而已

一 次序錯雜順列を正さざる唯僕が意思の浮むは従ふて其事情を書き中よ就て菅公の社ハ我國の神あるを以て佛寺の上よ置き加藤氏ハ治よ居て乱を忘るるの武業を弄するを以て藝林の初頭よ掲ぐ聊微意の存るは其他ハ則錯雜混淆全く新京極通を以て一郭境地と見あさる可あらん

故  
横山有策氏  
昭和四年五月  
寄贈  
冊二

西京繁昌記 初編

一 僕元來文字は暗し因て看官の快意は満つるのらざるハ  
 則固よりある然りとはいへども徒は此盛榮を見ず記せ  
 ざるも亦情なきは似たり故は不文を顧みず西京繁昌  
 の實跡を述て其盛を鳴らさざらん  
 一 實景を記せんと欲せば其實情を記せざる能はざる其  
 情を記せんと欲せば言猥雜は渡らざる能はざる僕豈猥  
 雜を好んや亦止むを得ざればあるを看官乞ふ之を恕せ  
 一 蛸薬師或は安養寺逆蓮華の縁起等の類頗る奇怪小  
 して虚誕の語無き非也此の文明は盛時に於て  
 然斯の如き奇怪を掲ぐ大は舊習因循の區域を脱せ  
 ざる者不似たり然りとはいへ共該地の繁昌を述んと

欲せば神祠佛閣の威を述ざる能はざる神祠佛閣の威  
 を述んと欲せば蛸薬師の以て魚名たる所安養寺の  
 以て逆蓮華たる所の縁起を述ざる能はざる其縁起を  
 述んと欲せば談寺此傳記は因らざる能はざる是れ自  
 然の勢ひよして止むを得ざればなり毫も信じて載  
 ざる非ざる看官僕の掲載を責る事無んは幸甚  
 弓は古昔より貴重なる所ありて武門の要器ありて  
 小所謂弓矢神といふ或は弓矢八幡といひ或は弓矢  
 の家といふ是悉く弓矢を貴び冠たるの證あり而  
 して近世砲銃の威ありて弓矢の道遂に商家の  
 手小落て翫器となる然りとはいへ共僕此書を編む下

編の第初頭小掲て上卷加藤氏の刀術に對して羽翼  
 兩輪に觀とて是れ亦武を棄てざるに一端小して治  
 小居て亂を忘る可らざるの微意あり覽者之を省せ  
 よ  
 一 此書新京極通り全地の繁昌を以て初篇とて而して  
 其他の繁昌ハ則二編に譲るといふ

明治  
 新撰 西京繁昌記初編凡例終

明治  
 新撰 西京繁昌記初編  
 目錄

- |      |      |
|------|------|
| 發端   | 菅公社  |
| 誓願寺  | 金蓮寺  |
| 蛸薬師  | 安養寺  |
| 居合拔  | 演史   |
| 電機器械 | 錦魚亭  |
| 滑稽   | 西洋眼鏡 |
| 蜚    | 楊弓   |
| 大弓   | 浮世節  |
| 三級酒樓 | 機關的  |
| 繩伎   | 廢人   |



竟市

女義太夫

於多福店

花遊軒

道場善哉餅

二ハカ

親玉饅頭

喉藝

小鳥の藝

猫鼠同遊

名鳥樓

千歳屋緒環蒸

影画

栗餅曲取

寫真店

演劇

明治新撰 西京繁昌記初編目錄終

明治新撰 西京繁昌記初編上

丹波綾部 増山守正著

發端

西京の繁昌新景極通を以て最とす肆店の盛ある爛繁  
 眼を奪し觀場の多き珍奇魂を驚し技藝の妙出沒神を  
 醉ハ一む肆店と觀場と技藝と合せ了以て西京の最大  
 繁昌をあらそ所以ふて高貴の者も往き卑賤の者も往  
 き窮蹙の者も往き雄鬼の者も往き伊勢參の者も往き  
 未ど因循脱せざる頭も鬢を頂き一行者金毘羅西國の  
 順禮等も往ぬあり若し夫と暮色四山を填め通店燈火  
 を上り満街光輝白日の如く諸品一層の美麗を添ふ遊



人雜還織る如く路を求る所あり殊は劇場上の額看客  
争ひ山をふり肩と肩と摩り瘤と瘤と撲つ親ハ子を呼ひ子  
を親を尋て叫ぶ混雑の中を無慚やハイゴメンヤス  
と轟々然と無理無体押合け来る人カ車何の速慮も荒  
くせ男左右へ開く人込ハ殺風景よ似とれ共是は繁昌  
中の一人波のおつ如くあり実西京繁昌の眼目盛大  
の第一よして凡そ西京の盛榮を知らんと欲せば先づ  
此地より始めむんバちる處のうづ鳴呼文明の世は逢  
ふそ此京は寓一よの京は寓して此繁昌を觀る記せむ  
んバ有る處のうづむ

管公祠

管公の忠誠美德千歳は近しといへども凛々猶今日の  
如く日は新し月は盛なりて其徳毫も地は墜るふ所  
謂忠誠金石を貫くの人よ非んバ何ぞ能く是の如くな  
らんや錦小路通り東の正面は當て管公の祠あり因  
せよ稱して錦天神といふ管公の美德上錦の字を加ふ  
るも偶然暗合して亦妙ありといふ處一信者恰も嬰兒  
の其母を慕ふが如く夜以て日は續き鈴舌心耳を澄し  
拍手誠心を表す毎月廿五日殊は子來の例日たり抑此  
前の街を寺町通りと唱へ近傍盡く寺院を以て填满し  
梵音誦經説法の壺木魚の響き海の如く沸くが如く中

管公文德  
至誠真拜  
客連綿日  
夜新請看  
遺靈水輝  
世滿都糸  
唱錦夫神



よ就て管公靈祠此間一神を以て衆佛に抗し  
聊り威炎を墜さむ高德燦然日は榮へ月進む所以ハ  
何ぞや是れ忠誠の本文筆の源はるふ因せあり今夫  
せ江河滔々と晝夜流せし息さるる亦本源の有せばな  
る嗚呼仰ぐ管公ハ忠誠至善の無盡藏文筆至美の  
棟梁と僕此書を編むるに於る之を閱卷の第一に掲げ  
其敬仰の真を表さるる

誓願寺

僕當寺の縁起書を閲し大略を抜書しるるに  
山派総本山誓願寺ハ  
天智天皇四年の創立より開山ハ慧隱法師あり本尊

ハ彌陀如来丈六の座像より賢問子效子國父子の作

桓武天皇延暦年中山城國へ遷都の時王城の東北に七

堂伽藍を建立する即ち其旧地あり方九町應仁以來度

々の回祿天文五年の秋と又天正元年あり何せも兵火

天正元年類焼後勅命を以て將軍信長公羽柴秀吉公

前田徳善院等を以て京極三條へ寺地御移し慶長二年

御再建落成のより惜以我當寺元治兵火の前猶敬度の

兵火類焼は因り諸品類焼其旧よ非る者多しと當寺

ハ彌陀如来四十八靈場の一よある順礼者信州善光寺

より拜し始めて當寺よ終りを結ぶとのや詠歌ハ

連綿香火  
夕連晨貪  
富不論千  
古新利益  
息深誓願  
寺頓生苦  
提出離人



極樂ハ壽命無量ニ長クシテ樂シクモ又盡ル事アリ

當寺高名遠近ニ轟キ參詣群集雲の如ク朝夕絶ル期ナ

中ニ就テ十月十四日十夜ト唱ヘ法會修行アリ貴賤

老若を問クバ男女貧富を論ゼモ殊ニ蝟集を去ルコト

詠歌の芭ハ人の心耳を澄シテ百八煩惱の欲を消シ念

佛の音ハ八萬四千の村雲を掃ク真如の月を輝ラセ

平等利益の誓願寺新嘉極街繁昌の最大基礎ト知らセ

た

金蓮寺

四條道場金蓮寺ハ人皇九十四代

花園天皇の御宇上総國住人牧野太郎源頼氏一子淨阿

と申モ僧有テ洛中念佛を勸進モ九十二代

後伏見院并ニ御后河端院御歸依ナリ應長元年八月此

所ニ一字の伽藍を御建立ナリ請トテ開山トシ勅願所

トシ寺号ハ綿綾山太平興國金蓮寺ト

花園天皇の勅号あるニ境内ハ明治五年迄四千坪餘

後光嚴天皇より下ニ賜ハレトシ本尊ハ阿彌陀座

像四尺四寸五分行基大師の作トシ元洛東鳥邊野寶福

寺の本尊ナリ嘉慶二年住職現覺より寄附ナリト聞

ク宗旨ハ時宗遊行派念佛御符施行の旨趣を歸依ニ立

所ニ一派を開キ同宗四條派の本山ト相成ル河端院

の御願ヒヨ寄り遊行派ニ祖ヨリ念佛の形木を淨阿ヘ

譲り洛中化益念仏の大道場とあるが故今世に至る迄人々只道場といふ但し此化益法式ハ其後中絶をとりし

時宗從來念佛堂 衆生化益福無量  
世人知否金蓮寺 昔日流行大道場

蛸薬師

薬師如来縁起の抜句といふ二條室町水の上は薬師如来ハ傳教大師の真作あり  
安徳天皇の養和元年は當り洛都室町は林秀長者と云ふ者あり常は薬師を信し一誓願を發し日々叡山根本堂の如来に詣り凡そ三十餘年及べり後夢想し因て傳教大師自作の薬師の石像を得たり是れ中堂如来

一體分身のよき急き室町は迎へ歸て六間四面の佛殿を營み永福寺と名く其後  
後深草天皇の建長の初僧善光ある者あり常は寺傍に住み香花燈燭已が任となりて怠らむ母重病は臥し蛸を望む善光孟宗は雪中の笋王祥の魚を思ひ孝養の爲め蛸を市よ求む諸人僧の不行を見將は其器を開るんと善光進退窮し一心念願此器を開けば則蛸忽ち八足を變じて八軸の法華經とあり瑞光四方を照し諸人驚歎し覺えむ合掌同色は南無薬師如来と唱ふ頃刻にして経復し蛸は變じて永福寺の池に入り光明を放て老母の頂を照らし病惱忽は愈は是より世人蛸薬師と

いひ爾來此處を御池の町といふ靈驗普く諸方よ傳へ  
 疾を祈せば則愈へ子を求めハ必生せ福を祈せば驗あ  
 らざるぬ中項に至る圓福寺兼帶の寺とあり又  
 後花園院の御祈願所とありとや參詣更一絶間あ  
 病を祈る為りて來る子子を求る為りて詣る福  
 の為よ賽まらう蛸の為よ來せらる人氣に乗て來せら  
 う何の氣も無く來せらるの附合ひ故よ拜まらるか往來雜  
 還沸く如く左右経緯織るよ似たり病の為め子の為め  
 福の為め蛸と人氣と附合ひと信と不信と合せ一  
 繁昌を為る所以とあり  
 因よ云ふ都名所圖會よいふ蛸藥師ハ永福寺と号し

て圓福寺の境内より  
 師像ハ石像あり長二尺傳教大師の作あり  
 谷みり又蛸菜師と号するハ舊地小澤王山此處  
 て都下の人澤藥師と稱せし後世誤て蛸菜師と云  
 風説せり古の堂の梁の銘ハ三條水邊の記縁起  
 を記し侍る云云とあり都名所圖會ハ權僧正龍秀  
 を撰し是の記とありやを知らず江湖の君子參考  
 の為何此よ掲ぐといふ

名大寺街蛸藥師 藥師魚號又何奇  
 請看該事因縁記 一目瞭然眸下知

安養寺

蓮華本尊弥陀如来略縁起を撰書して曰當寺本尊  
 ハ春日明神の真作なり了女人攝取の如来と号す昔大

和國當麻の郷は惠心僧都の母公清原氏の信は因て明  
 神老僧は變ト半夜の間は其丈六尺ふり相好圓滿ふ  
 る尊像出現と其後臺坐を作り奉るは崩る事三度或  
 夜夢の中は本尊告させ玉ひけるを過し項明神一人の  
 老僧と現はせ我形像を作する事は則女人往生の姿  
 あり然せば八葉の倒蓮華を作り我を安置せ給し其故  
 ハ大日經の疎の如く男子の心蓮ハ上は向ひ女人の心  
 蓮ハ下は向ひて倒あり悲うふ無量生死の中は適々受  
 がたき人身を受るといへども曠劫も改め難きは五  
 障三従の形自ら生死は吟行のさあむを多の人を惑を  
 一同く三途の苦を受おむる事其罪幾何と生死是

小因て改むる事能ハと奈は況や成佛をや我大悲此機  
 を憐んが為子重て三十五の願を誓ふと最懇小示玉  
 へバ母公有難く思ふ則佛勅よまうせ倒蓮華を作らせ  
 安置し奉り今立せ玉ふ臺坐是あり誠は此本尊ハ女人  
 往生の悲願を顯し玉ふ故よ現世は於てハ女人の諸役  
 安産を守り玉ふ其靈驗歎ふらむと違はらむと云云當時  
 本華臺院と號を閑山ハ惠心院源信僧都第二世ハ城都  
 安養法尼あり道德を慕ふて時の人安養寺と号しける  
 とかや

女人攝取逆蓮華 夢想從來信佛家  
 二世法尼安養德 遂成代代々寺名花



居合抜

居合抜ハ方今加藤谷五郎ある者を以て最とを大小の  
 刀を抜き人を聚め之を媒とて齒藥を賣り口中を療  
 齒を抜き齒を入る真其妙を得ざるあり諺に所謂手  
 拍子で齒を抜くの譬喩ある加藤氏其實の實ある者を  
 得るといふなり大太刀ハ柄鞘共は曲尺を丈貳尺小太  
 刀ハ同く三尺二寸加藤氏の流義ハ淺山一傳流を學  
 以て其術を得る由其術扇を柄頭より立て此扇の地  
 落し追ふ其刀を抜て之を切拂ふ事百一を失せむ其他  
 太刀をぬき之を振り之を舞ハも旋轉電光の如く叱々  
 風生を忽疑ふ刃頭露を飛むをかと又恐る看客の毀傷



丈二長力飛舞優  
 神州今日絶同儔  
 無雙妙術淵源在  
 即是淺山一傳流

口中一切癒給

せん事を抜く手振る手納むる手其迅速流星の如く共  
一確視をへらむを而して加藤氏神手餘閑何つる優然  
たり僕親しく居合場の詞を加藤氏小問ひ武道の一端  
あるを以て藝林弟初頭は此技を掲ぐ亦治は居て乱を  
忘るるをのらざるの微意あり以下の詞章は加藤氏嘗て  
用る所の語を摘み因は爰に載せし看客の一笑は供  
を當時日々此語を用ふと云ふ非む亦舊を存するの意  
あるを看客夫せ之を省せよ  
居合拔師を親方といひ門弟を奴と唱ふ先生身を繕ひ  
體を固め場は出る衆は揖して曰僕ハ加藤谷五郎と申  
る者斯く繁榮の地は於て人を寄せ居合を抜き候義抑

此義ハ武藝十八般の中あり偕大太刀の始りといつた  
其昔勢州度會郡宇治と山田が原は御鎮座ありまを伊  
勢神明 天照皇太神宮守護を女は天津兒屋根の尊  
と云へるなり上州にて亀井山は立せ玉ふ鹿島太神宮  
是あり時の別當は江笹長兵衛入道長門守は此家臣  
小松本豊前守直家と申して脊の高さハ六尺八寸計カ  
の強さ凡そ八十人カ天地覆さん程の勇士たりとい  
へども猶其術を試し見んと有て春四年夏四年秋四年  
冬四年此四季を象り四々十六ヶ年の間居合劔道修行  
はる其時エイヤハツシと抜たる劔は眼を寫し中段は  
行は鐵石は坐をしぬ八方より劔降り来り火焰を吹き

出まを事と致さへ八重垣ふ八重雲アエサ青眼冠り  
落し天は渦巻く梵字の降り劔磯おつ波の高股返し切  
かけ御覽よ入せませ

抑小太刀の始りといつを其昔清和源氏左馬頭源義朝  
公の九男九郎御曹司牛若丸此人倒し源氏を起さん  
と有て鞍馬山へ楯あそり僧正坊の御弟子とあり日々  
は劔道御修行遊むをとり或時都五條の橋よて武藏  
坊辨慶夜ふ千人切を致させとふ其時牛若丸父  
供養の為と有て鞍馬山より竊り來りて辨慶と打合し  
たる太刀の名ハ龍王鏑攻め鏑碎き無一無量無二無三  
事小愚や長短の一味の一八一と書く味ハ味ふと書た

る文字の理合し長ハ長短ハ短長キ刀を短く抜く  
利方を御覽よ入せよを最前御披露申しと句入り清  
正香何も店で商しよと百五十文五十文減少致し今日御  
用とラツシヤル御方よハ一服百文若し御用とラツシ  
ヤル御方が有らば重寶の書付を添へる百文御用と何  
せバ居合の後ドやアイヤイ親方幸向ふ御用とラツ  
シヤル御使も覺への御方御待りぬジャソナラた  
んとハいらぬ三服だけアイヤイ親方賣せよタマク  
向ふ御用とラツシヤルコラく今日一番最初買ふ  
人ダ福の神アイヤイ親方買ハむよ立て見て居る奴を  
見倒し貧乏神でゴザイコラく粗相云ふやソナラ

モウ一服加藤谷五郎家傳の齒研き御手を取て白らば  
 無くバ御返しふされアイヤイ親方賣せま〜未どく  
 向ふで御用とラツシヤルコラく余りアツカマシク賣  
 るふ齒研き賣りのアツカマシイのと女のアツカマシ  
 イの〜ハ見て居ても面の悪いアイヤイ親方買ハまよ  
 立ち見て居る奴も猶面が悪コラく粗相云ふやうなアイ  
 ヤイ親方うせま〜未どく向ふ〜御用とオツシヤル  
 ヤツコアイヤイ能く申してコイ立派な御若以衆や娘  
 さんで口の臭い人と嘸を志て見よアイヤイ親方肛  
 門と嘸をまらやうでゴザイ

演史

當時西京演史家の高名ある者尾崎といふ南海といふ  
 萬丸といふ其他燕龍東海燕真晴山幸伯圓の輩枚擧よ  
 暇は〜和漢の治亂古今の得失述ぶる無く説のさる  
 無一先生高座より威儀を繕ひ容姿を修め故は眼  
 下の左右を睥睨し恭々衆客を揖し從容と〜説を  
 曰く僕不肖なりといへ共幸は貴客の眷顧を蒙り風雨  
 を厭むを時間を違へむ速に駕を枉玉ふ僕の大慶何事  
 う之よ如んや厚く禮謝し奉る諸今日演説ふ及びま  
 る讀下ハ昨日の續き豊臣太閤記賤ヶ嶽大合戦の掛り  
 口北國の勇將佐久間玄蕃頭盛政中川瀬兵衛尉清秀元  
 來武功名譽の勇士紺糸威の鎧を着し十五作り其曹楮首

虚談實録兩

相傳演史

胸中淘汰全

和漢盛衰

真似見扇頭

妝得古今

權



よ着ふ相州貞宗三尺二寸の大業物を帯馬に跨り  
 好む慶の双廣き大身の鎧を馬の平首に引添へ柵門を  
 颯と閃き真先よ進み嘯と喚て突て入り大象の波を渡  
 るが如く北越勢を突崩を佐久間盛政大ふ怒り八尺計  
 の鉄棒を軽々提げ中川勢を馬人共よお倒し互よ入亂  
 きて大よ戦し中川清秀ハ鎧を突折り大太刀抜て渡り  
 合真向立割胸板割當るを幸切落し蜘蛛手角繩角十文字  
 馬ハ逸物乗人ハ達者相州貞宗三尺二寸恰も草を薙ぐ  
 如く餘りよ強く戦ふて胃も着せむ髪振るごとく大童と  
 あつて敵を追退るふと九度其勇威天神のおとく連島  
 傳藏下田忠次郎佐用田周次兵衛竹島伊平太前後より

四足連とる小熊の如く清秀を中へ取籠めおる掛るを  
 清秀即時は四人切伏る玄蕃頭大は怒り鐵棒お振り向  
 けり清秀太刀を下段に提げ一呼一吸虚々實々玄蕃頭  
 項王の勇を顯はせを清秀警噲の威を振ふ更は勝負も  
 付ざりしが佐久間が郎黨近藤無一郎鎗を上げ突掛る  
 を清秀透さむ振返り切拂んとともり所を佐久間玄蕃  
 頭早くも馬を乗りよせ微塵よせんとお込む鐵棒受損  
 憐む登り中川清秀左の肩先へ打込せ馬より下へ嘯  
 と落つ云云と其雄辨ハ風生ト賈誼も大息敗北し蘓秦  
 張儀の縦横も合従連衡粉微塵よ土崩瓦解の風情あり  
 川柳の句より講釋師見て来とやうよ吁詐を付きと

恰も疑ふ座上一戰場を現れ出たの談漸く佳境小入  
 り大喝一聲扇子の音ハ霰の板屋を走るが如く抑揚頓  
 挫奇々妙々衆客我を忘きて瞳焉より既にして衆客少  
 しく倦む俄然音の席上は湧くなり是を睡漢夢中誤て  
 放屁もるあり衆笑抱腹し演史閑を偷て汗を拭ふ

電機器械

實の實なる者有り是を電氣器械の装置にして方今流  
 行の電信機の景況を知ら志む抑電氣ハ博物新編譯解  
 の電氣論はあり通り大地の體ハ氣なり電といふ流  
 形の内外小雜はり賦く物として有らざるふく時として  
 然らざるあり電氣ハ絶て類々同らせり聚り動く時ハ

電とあり火とある静小隠る、時ハ散じて密ニ藏る其  
 本原の質内ニ陰陽の二性を具ふ陰陽とは非也造化中庸  
 の道を得て偏ふるも倚らぬ過不及あり器物の中の如  
 き一を孤陰とあり一を獨陽とあり則陰ハ必も陽ニ合  
 ひ陽ハ必も陰ニ合ふ勢めて必も彼此會合一氣ニ調  
 和を天空ふる二つの雲の如き一を電陰氣とあり一  
 ハ電陽氣を具ふ二つの雲相近づき勢必も陰陽傳へ引  
 き轟撃て聲を發せ火を見て呼て電とあり聲を聞て呼  
 て雷とあり此を乃ち陰陽和せざるの證據あり中畧西  
 洋人電氣を作るの法あり其理奇小して用大あり藉て  
 以て音信を傳通する者あり藉て以て瘋癲を醫治する

者あり藉て以て火炮一引燒者あり藉て以て器物を製  
 作する者あり功盡く述難し其之を製するの法ハ清水  
 一盃を用て磺強水少許を入硝石水塩強然して後  
 一の銅片と一の精錳精錳の性質即電氣有て發し出づ若し鐵線  
 ハ精錳水と同一トく化し即電氣有て發し出づ若し鐵線  
 と銅片とを以て相連ぬれ電氣自ら鏡線の間小傳る  
 り鏡を以て鐵を引き傳述で窮りなし試し物を以て其  
 端小觸れハ即光點有て物を射る然として響きをあ  
 一指の甲を彈くが如しと云々右の如き此理を以て千  
 萬里の遠きも須臾小其信を傳るふり今此小其理を摸  
 造し銅と白鉛とを相合して電氣を起し鏡條小傳へて

太鼓を鳴らし或ハ洋傘の柄より水を放ち電氣の通  
 る景況と知らしめ或ハ曲りたる鐵の両端小鏡を吸  
 め人をして之を引去む粘着力甚強一六百目の力有と  
 言ふ或ハ器皿小水を入き硫酸と鏡を投下て水素を分  
 離し或ハガルハニの装置を設けて人小電氣を送り人  
 々相傳つて凜然毛聳せしむ是を觀場中其實の最なる  
 者なり肆頭の奴誇り呼て曰餘の觀物ハ違ひまは虚  
 假あらハ價ハ戴ませんと宜ある哉言や真小文明小適  
 せし觀物と云ふなき歎

電氣一條傳鐵端 機關變化具人看  
 文明開化君知否 即是文明開化觀

錦魚亭

四季共小金魚を賣る其實金魚を錦魚小誤り記せし者  
 からん庭あり大石を聚む龍蟠の者あり虎蹲の者あり  
 青松繁茂翠滴らんと欲す其他珍草雜へ栽り池小清水  
 を湛つて金魚を放ち其數億の之ならず其種亦多し朱  
 魚あり銀魚あり鏡魚あり金鯽あり紅鯉あり尾長あり  
 鯉臣あり浮沈游泳爛燦眼を奪ふ瞥疑ふ紅葉池底不在  
 るかと又認む水神錦機を織るると満庭清觀興云ふ  
 からぞ亭善哉餅を賣り又水蛭を賣る其水蛭を蓄ふる  
 猛冬烈寒結氷銅鐵の器を破り巖石を碎く此時といへ  
 共未ど曾て絶る期ふし業亦勤めありと云ふ可し抑金



魚ハ贅魚あり此記も亦贅記なり然りと一トモ共都會トモ非んハ此贅魚を賣て活計を營む能ハ以繁昌地ハシ非んハ此贅記とナ一ツ笑セウ子供コなラる所以ユ合せて一大都會一大繁昌地たる所以ユ

奇石怪岩池滿庭 金魚游泳錦魚亭  
 清凉殊覺風流客 數尾買歸硝子瓶

滑稽

滑稽是れ亦一種の談叢ハシある者圓轉骨語ハシと以て基礎と一虚實表裏の對語と以て結局と一常ツ愚人を役使ニるを以て作用と長吉といひ喜六といひ吉公といひハシ熊と呼び阿源と呼ひ阿三と唱ふ是は滑稽城中一痴當

臨機應變  
 滑稽場戲  
 謹日新無  
 盡藏不爛  
 風生三寸  
 舌乾坤顛  
 覆浪飄揚



百景  
 繁昌地  
 滑稽

千の阿房あり滑稽師辨舌と門帷の内より廻らし大入を  
 千里の外より求むる人の誰とくぞや則松鶴慶治菊助三木  
 福松の類あり其滑稽圓轉玉の盤を走るが如く活潑潑  
 地天地を以て丸呑し古今を以て尻より放出し瓢箪  
 と馬駒を出し打出此小櫃より金と飛花龍宮七姫の瘧  
 誕地獄天狗の妄談阿嬢の遺尿老婆の春情に至る迄舉  
 ざる無く説くばる無く恰も疑ふ滑稽師の口より先へ  
 生るゝかと實は滑稽の談叢落語の淵海と謂ふを一  
 言一語人の頤を解かざる無く人此臍をして西國せし  
 欠ざる無し坐中甚恐る頤の機關の脱走雷公の臍を掴  
 ん去らん事を既に一人此客あるや滑稽師速に座の上

り扇を以て頻小見臺を敲き滑稽を述べて以て絶倒せ  
 りむ彼の演史家の威儀を重んず來客の満るを待て後  
 吟を開く小似せ其言小いふ是の如く扇を鳴し見臺を  
 敲く者へ容を釣り込む六韜三略の計策あり唯ほんく  
 とアホラレイ獄門臺を見るやうに見臺前小首居べて  
 馬鹿小進阿房小冠り愚痴は幅輪懸る如く譯も無  
 き事シヤベリマス丸で阿房の狂人の様に見へる志よ  
 去りあからマンザラ馬鹿や阿房の出来ません賢い  
 御方の猶為さすやシマセン到底阿房と賢みの間の子  
 の出る商賣でアリマス此商賣を聞ふゴザル貴客方も  
 遁まぬ中ゴザリマス

へい御隠居さん御免遊むせや隠居ホ、誰おやと思へ  
 を備前屋の御内儀さん妙々是ハ久々十年以来能く御  
 登り成されまゝ是は阿里よく備前屋の御内方グワ  
 セラレタ是は勘藏よく御茶を上ませ以内儀オホ、  
 是ハ可笑御隠居さんサトのカンザウのと甘い御名を  
 ろ望でゴザリマス隠居イヤく未ど有マス是は阿蜜く  
 早く出て御眼よ掛リヤ内儀是ハく旨以者揃ひでゴザ  
 リマス最早是はきざりてゴザリマスカ隠居イヤ勘藏の  
 姉グ一人有りまはグ病身故尼グ崎の左寺へ遣まゝ  
 一とが此頃ハ出世して庵持ちふありまゝ

西洋眼鏡

サアオハイリヤスノ、五十三次名所其外日本アラユ  
 ル名所唯今丁度ヨイ所サアオハイリヤスノ、トシヤ  
 へル者ハ西洋装置の眼鏡肆頭の奴あま其状癖の如く  
 愚比如く人さへ見ればサアオハイリヤスノ、五十三  
 次名所日本アラユル名所唯今丁度ヨイ所と呼ぶ丁度  
 ヨキ筈其装置二階作りの常仕掛客の多少小抱えらす  
 丁度宜しき所とハ客を鼓舞する名語あり肆頭ハ奇石  
 怪岩を列ね草木を配り植へ鐵道状を模造して小蒸氣  
 車の態を以亦一奇あり行人足を停めて之を觀る彼  
 の奴殊に精神抖擞して例比オハイリヤス云々を頻に  
 述べて勞るれば則黙して休ませ又叫ぶ一叫一黙同言同

名區勝地百  
 觀場裝置從  
 來無盡藏真  
 形映出疑非  
 畫人似欲言  
 花似香



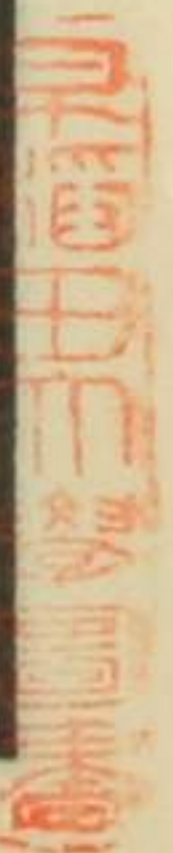
多き力  
 用はる  
 大いなる

伊豆の  
 伊豆の  
 伊豆の

語其一ふる鸚鵡の人此言を真似るが如く終日の變化  
 か一此奴人ふして鸚鵡を真似るといふぞく其愚憐れ  
 むぞく其直愛を可一鸚鵡ふして拙あらば此奴ふも  
 如ぞと云らん乎而して此舎の建築能く西洋の風致を  
 模造一樓上樓下共眼鏡を配列し能く其圖を寫して  
 巨大ならむ山川の精影人物此秀麗歴々として身其  
 境小在る如く覺つぞ奇と呼び快と呼ぶ看客蟻附之を  
 覗く真小夢中の觀とる以中よ就て忽然キヤツと揚殿  
 せる者あり是惡少年あつて狂娘の尻を捫するなる其  
 父激怒方小之を撲んとて衆愕然眼鏡一度小空一該漢  
 狡黠遁辭して曰く群客雜還我を押し覺へば手接を

るれど豈他意あらんや足下止む無んを我を押し者を  
 を撲て該父止むと得て黙をといふ風波頓ち定り  
 看客循環回轉遂に出去る又別所は雲僊器械と唱ふる  
 者あり是れ亦眼鏡の装置異あらざといひ共中よ就て  
 機關を設け人物舟船動搖の狀態を觀望せしむる者又  
 一層の妙工美觀といふを然りとといひ共眼鏡の映寫  
 大同よして小異れみ故に此小贅せぞ嗚呼大都會は非  
 んば是の如き大装置と設る能らば大装置は非んば是  
 の如き大美觀を樂む能はざ抑大装置と大美觀と合は  
 せて一大都會の繁昌の實を呈する所以あり

蚤



桑田變トて海とある古句は何日ぞと思ひし變化の  
 無窮西京の新京極小海の出來龍宮城の形をバ模造せ  
 一画ハ虚なき共數丈四方に池を掘り水を湛つて蚤二  
 人あつと云ひ水に游泳沈潜し自由自在小水上小波欄  
 を起し出沒し水庭小ゆる鯉魚擲こ上りて客の覽觀小  
 供ふ婦女子の水煉れ術は感ぜぬ者あり是まも西京  
 繁昌比一大餘波湧出し新盛海と知らせたる

碧浪新開紫陌頭 青春兩女術尤優  
 水紋消處沈無跡 忽起波瀾攫鯉浮

楊弓

禮記射義小曰男子生るをバ桑の弧蓬の矢六つを以て

天地四方を射る天地四方の男子の事ある所ありと  
 共今の揚弓の事此有ても間ふもぬ子供遊びの戯  
 ふれの玩弄物何故滅多無性小流行一踵と接ぎ  
 遊客冷郎夜を日と續で絶間なり  
 揚弓店の有名ある者都山といひ玉山といふ其他名稱  
 衆多枚舉と暇らざるゆり之を主る者皆婦女子三五  
 の女二八は娘紅粉の美を競ひ桃李の艶を争ふ嬋娟照  
 手かと疑心窈窕小町ると認む笑靨愛を盈し明眸秋水  
 を凝一媚を倚ひ矢を取て以て獻る此は於て知る揚弓  
 の武用益無くして婦人の玩弄物なる事を  
 目的有て然る乎心を煉るる為ふして然る乎客ハ則多



くハ山僧書生丁稚の輩中ニ就テ注眼佳人ニ在テ心其  
 正鵠ニ非ル者多キ乎體正一カラズ弓矢ヲ持ツ審固ニ  
 ラズ弓矢ヲ持ツ審固アリビシテ此ニ以テ外ヲ知ル  
 ぞく此ニ以テ太鼓ヲ鳴ラズ其音ハ則鈍ク多ク知ル  
 べし此ニ於テ別品ニ迷ふヲ知ル又別品ノ美矢ニ  
 我心魂ノ正鵠ヲ射散ラシテ天外ニ在ルヲ知ル  
 恐るべし藝ノ熟ルヲ彼ノ婦人右小弓ヲ持チ左ニ矢  
 ヲ狭ミテ逆小之ヲ射ル心ニ迷ふ所ナク弓矢ヲ持ツ審  
 固ニ以テ百々モ發テ百々モ中ル其音ハ賢々たるヲ知  
 る  
 嗚呼是の如き贅具を賣り是の如き贅遊を買ふ是の矢

の如き光陰を輕んト益なき事小消光ニ頗ニ疑ふ是の  
 人亦贅人ナリカト然リトイフ共古語ニ曰ク張テ弛  
 ざるハ文武も能ク弛テ張ラざるハ文武も為ス一  
 ナビ張り一トモ弛ゆるハ文武ノ道アリト是ニ皆大勉  
 強今文武先生ノ弛休遊小シテ果シテ知ル文武ト其徳  
 を同クする人ナラズ庶幾クハ大勉強先生等必ズ僕  
 ガ正鑑ヲ誤ル事勿ク諺小所謂枯木ハ山の眼ヒト贅ト  
 不贅ト合せて是の都レ一大繁昌ヲなす所以アリ

西京雜記

初編上

三

[Faint, illegible text within a rectangular border]



